

詠む広場

平塚市 目下 光代
野をゆけば草の息あり春浅し
平塚市 正好 浩
菜の花を生けて備前の壺ひとつ
日高市 秋葉ふじ子
土の香も水の匂ひも春となり
茨城 石川 昌利

須崎市 野中 泰佑
カトラリー並ぶテーブル春隣
見附市 岡村 文字
ポシエットに着信音や春の雨
秦野市 相良 研二
路線バス乗客ふたり春の宵
長岡市 窓井 まり

東久留米市 矢作 輝
濡れ縁に鶏上がりみて長閑けしや
東京 山口 照男
日向ぼこ幸せそうな愚痴一つ
猫抱けば日向の匂ひ日脚伸ば
甲府市 山田 敦子

藤枝市 山村 昌宏
様々な握手を交はし卒業す
東久留米市 夏目あたる
鬱々と糠雨つづき三月果つ
北九州市 土居 康二
暖かや石見訛りの人どめて
雲南市 熱田 俊月

伊藤 一彦 選

米川千嘉子 選

加藤 治郎 選

水原 紫苑 選

勲章より脚ある方がよかったと虚ろに語るロシアの兵士
つくば市 小林 浦波
▲評▼ウクライナからの帰還兵の言葉と表情が作者に詠ませた一首。ロシアで報道は抑えられているが、PTSDも深刻だ。

たましひは羞づかしがりや目をやれば亡夫の寝息はきつと止むらん 大阪市 森川 慶子
▲評▼亡き夫が横にいるような気がしたのだ。それが錯覚であることにも作者は気づいている。上句が切なく心に残る。

助詞だけを並べて意味を成すようなシュ・トゥ・ヴすし唇を閉ざして 武蔵野市 北谷 雪
▲評▼「シュ・トゥ・ヴ」(あなたが欲しい)はエリック・サティが作曲したシャンソン。短い音を助詞のように感じたのだ。

遺伝子という猛禽がわたくしを系統の樹のこずえに落とす 堺市 石井 藍
▲評▼遺伝子の支配によって、系統樹の最後に自分がいることの悔しさ。だがそれがこんなにもみずみずしいとは。

守るべきもの失ひし城壁は舞ひ散る花に鎖もりてあり 神戸市 中林 照明
▲評▼情景のしつかり見える確かな歌い方に作者の人間観・歴史観が深く出ている。

クリーニングに春を出す 花柄に隠されていく汚れを思う 三鷹市 菅原 海春
▲評▼「春」をクリーニングに出すというのが新鮮。悲しい「汚れ」がある。

▲評▼はかなくてひんやりした笑みである。朝の風景を見ている妹をスケッチした。食いつけばクリームあふれ出て、わたし彼女を好きになるって決めた 所沢市 神田 望
どうしてもあの行列には並べずに三日月ほそく後悔してる 京都市 小川 ゆか

波止場へ、と書き残しては家を出るけれど陽射しはもうあたたかく 横濱市 砂月 七
歯を見れば骨の美しさが分かるジュンパ・ラヒリの小説は夜 碧南市 江原 冬莉
目が合えば目だけでわらう完璧な満月まではすこし足りない 札幌市 鈴木 精良
もはや無を表現することさえもいたたまれないほどに何も無い 横濱市 安西 大樹

毎日歌壇

春雨に誘い出されたミミズらの水に溺れし啓蟄の朝 宮崎市 上米良綾子
満天の星空捨てた人々が手元に灯す小さな明かり 名古屋市 外山 雪
信じてる 星の見える星さへもすべてひかりを発しているから 東京 石川 真琴
公園のジジッと灯る街灯が今日のわたしのbirthを祝う 春日井市 月夜の雨
つばめの巣ではなく点いてないライト可愛すぎて気づかなかったけど 横濱市 永永 キヌ
だん、だん、と御堂にリズム刻みゆく修二会
の僧の春呼ぶ音 奈良市 島本太香子
散りて来しサクラも入れて庭先に渦を巻きの
る旧洗濯機 始良市 山下 太吉

我が生家を重荷なのよと兄嫁が語れば哀れ褪せた雛飾り 我孫子市 日向子
お隣にトトロはいない プラチナの高値に押し
され指輪を売った 碧南市 江原 冬莉
涙ぐむわれを悲しむ声なりき道着の父の叫ぶ
「頑張り」 秋田市 齋藤 朗
二つ三つ問いたれば医者は顔も見ずネットに
載っているからと言う 福山市 伊達 則子
結果の練習続ける若き医師外科教室の医局の
隅で 倉敷市 中路 修平
注文はネットでポチリ配達苦勞を知りて今
日もためらう 東京 蛸谷 定幸

あ頃の宇宙は六畳ワンルーム バスタブ磨
き歌い続けた 和歌山市 桜庭 紀子
遺伝子という猛禽がわたくしを系統の樹のこ
ずえに落とす 堺市 石井 藍
▲評▼遺伝子の支配によって、系統樹の最
後に自分がいることの悔しさ。だがそれが
こんなにもみずみずしいとは。
黒ずめば半分醒めた夢のやう(山茶花)べつ
に、やさしく、なんか 横濱市 永永 キヌ
▲評▼(山茶花)が絶妙である。半分さめ
た夢のやう、とは気の毒な。
波止場へ、と書き残しては家を出るけれど陽
射しはもうあたたかく 横濱市 砂月 七
歯を見れば骨の美しさが分かるジュンパ・ラ
ヒリの小説は夜 碧南市 江原 冬莉
目が合えば目だけでわらう完璧な満月までは
すこし足りない 札幌市 鈴木 精良
もはや無を表現することさえもいたたまれな
いほどに何も無い 横濱市 安西 大樹

初めの顕微鏡での観察にソウリムシ派と葉
っぱの気孔派 倉敷市 中路 修平
とりあえず泡立てている卵白も地元に残るほ
うのわたしも 金沢市 塩本 抄
春一番 延命処置をしてもなお薄命である二
月が放つ 那覇市 奥村 真帆

うたは奏でる

「天空のコントラバス」より。大人数で食事することやコミュニケーションが苦手な生徒には、黙食は救いでもあろうと想像している。「みんながひとり」という措辞が、生徒たちの個性とその孤独をむしろあたたかく包み込んでいる。歌人の洞察力がコロナ禍の非日常を経て、日常に隠れていたものを炙り出したのである。(そのの・たろう) 歌人

投稿規定
はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(https://mainichi.jp/kadan-haidan/)でも受け付けています。
おしらせ 毎日新聞社は31日、新設の「合同会社俳句てふてふ」に俳句アプリ事業を引き継ぎます。両社はともに俳句文化の発展に取り組んでいきます。



こちらから投稿できます